

# ニューズレター

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE, Kanto Gakuin University

## —目次—

2021年度活動報告『キリスト教と日本の精神風土』グループ	1
2021年度活動報告『バプテスト研究プロジェクト出版事業』	3
新所員紹介	5

(通常と紙面の構成を変えてお届けしております)

## 2021年度活動報告

### 『キリスト教と日本の精神風土』グループ

豊川 慎 (理工学部)  
Shin Toyokawa



「キリスト教と日本の精神風土」研究グループは、コロナ以前は八景キャンパスのフォーサイト7階の会議室を会場に研究会を年3~4回開催していたが、現在は同頻度でZoomを用いてオンラインで研究会を開催している。客員研究員の先生方に自分の研究テーマや関心に沿って発題して頂き、質疑応答の時間を持っている。2021年度は4回の研究会を開催した(予定も含む)。以下、その概要を報告したい。

第1回研究会は2021年5月29日(土)15時から17時半まで行われ、中嶋昭子氏(本研究所客員研究員、捜真学院学院長)が「日本におけるカトリック教会再宣教の展開とプティジャン司教」と題して発題された。カトリック教会の日本代牧区について、1875年から1884年までの10年間を考察時期に定め、特に代牧区の南北分割とプティジャン司教 Bernard Thadée Petitjean (1829-1884) による最後の宣教活動に焦点をあわせて、幕末維新期のカトリック宣教を担ったパリ外国宣教会の古文書館所蔵史料を主資料として報告された。

第2回研究会は7月31日(土)15時から17時半まで行われ、スムットニー祐美氏(本研究所客員研究員、本学非常勤講師)が「イエズス会の布教と安土・桃山時代の茶の湯—ローマ・イエズス会文書館資料による考察」と題して発題された。イエズス会東インド管区巡察師アレックスandro・ヴァリニャーノ(1539-1606)による今日では「適応主義」(「適応主義」とは『新カトリック大辞典』によれば、「カトリック教会で、福音の本質を変えず、時代、場所、異なった文化の中で、福音の表現を変え、その深い理解、受容を目指すことを意味する」)とよばれる宣教方針の中に「茶の湯」が含まれていたことが報告された。

第3回研究会は11月6日(土)15時から17時半まで行われ、山本直美氏(本研究所客員研究員、同志社大学非常勤講師)が「西田天香(1872-1968)の一燈園における「個の完成」と「新社会の実現」という挑戦—見田宗介の<最適社会><コミュニオン>の概念を手がかりに」と題して発題された。一燈園は、問い続け、祈り続ける宗教「集団」なのか。一燈園は、程なく形骸化したリミニナリティなのか。一燈園は一定期間「最適社会」「コミュニオン」を体現した「集団」なのか。このような問題意識の下、見田宗助による「最適社会」、「コミュニオン」の概念を用いて報告された。

第4回目の研究会は2022年2月19日(土)に開催予定であり、三井純人氏(本研究所客員研究員、心理カウンセラー)が「フロイト以降の臨床心理学の流れの背景にあるキリスト教の霊性」(仮題)と題して発題を予定している。

「キリスト教と日本の精神風土」研究グループのメンバーは私を含めて15名程であるが、客員研究員の中には遠方にお住まいの方もおられるため、研究会をオンライン開催としたことによりこれまでは参加できなかったメンバーも研究会に参加できるようになっている。このようなオンライン研究会の利点も鑑み、次年度以降も、基本的にはオンラインでの研究会を続けていく予定である。いずれは「キリスト教と日本の精神風土」をテーマとして、客員研究員の先生方の発題をまとめた論文集を刊行したいと考えている。「キリスト教と日本の精神風土」というテーマに関心があり、当研究会への参加を希望される方は是非ご連絡いただきたい。

## 2021年度活動報告

### 『バプテスト研究プロジェクト出版事業』

内藤幹子 (経営学部)

Mikiko Naito



関東学院大学出版会が目指す事業のひとつに「建学の精神を具現化するキリスト教関連書籍の出版」が挙げられています。当研究所に連なる「バプテスト研究プロジェクト」は、大学出版会の後押しとご協力に支えられ、また当研究所からの出版助成を頂き、キリスト教研究の中でもとりわけ本学のルーツであるところの「バプテスト」に関する歴史・思想研究を扱う書籍を定期的に発行させて頂いています。改めて、多くのお支えとご理解を各方面から頂いていることに感謝を申し上げます。

「バプテスト研究プロジェクト」の活動の実りとして最初に世に出されたのは『見えてくるバプテストの歴史』(2011年)でした。「これまで、バプテストの教育機関におけるバプテスト史の邦語教材はあまり存在しなかった」(本書「あとがき」より)という状況の中で、包括的にバプテストの歴史を学ぶための「教科書」として生まれた本書は、バプテスト系の伝道者養成機関をはじめとして多くの方々の手に渡り、豊かに用いられてゆきました。

その後、2017年より「関東学院大学 キリスト教と文化研究所 研究論集」として『バプテストの歴史と思想研究』シリーズの定期的な発行がなされるようになりました。「発刊の辞」として掲載されている文章が、本シリーズの性格を端的に表現しています。

「本誌は関東学院大学、キリスト教と文化研究所における『バプテスト研究プロジェクト』の研究者による小論集である。日本におけるバプテスト史研究、またバプテストの思想研究はまだ十分になされているとはいえないが、こうした研究誌により、バプテストの学的研究が少しでも進められることを祈っている。日本の多くのバプテスト教会の教会形成に役立て

られ、同じ教派的伝統に立つ教育機関のさらなる発展を願いつつ発刊の辞とする。」

日本にはバプテスト系の神学部を有する大学(西南学院大学)があり、バプテスト研究に従事する研究者が各大学や神学校、協力伝道団体(日本バプテスト同盟、日本バプテスト連盟など)に連なっておられます。しかし、バプテスト研究に特化した、しかも定期的に発行される書籍はなかなか国内で目にすることができません。バプテスト研究者にとっても、教派や所属団体を超えて自身の研究成果を発表することのできる貴重な場であります。

更にこの『バプテストの歴史と思想研究』は、丸善出版株式会社を通して主にキリスト教系書店においても手に取ることができますので、大学や神学校の「紀要」よりも気軽に一般の(主にバプテスト系の教会に連なる信徒や教役者)方々に届きやすいという利点も感じるどころです。

2020年度は新型コロナの影響下で大学出版会が通常の事業を進めることができなかつたため発行を断念せざるを得ませんでした。2021年度に執筆・編集作業を行った第5号が2022年2月の予定で無事出版の運びとなり、感謝です。個人的なことになりますが、長年「バプテスト研究プロジェクト」の働きをリードし丁寧なご指導をくださいました村椿真理先生(法学部教授)から内藤がプロジェクトの代表を引き継ぎ、この第5号が代表として最初の仕事となりました。一つの書籍ができていくプロセスにおいて、大学出版会の皆様をはじめとして本当に多くの細やかな配慮のあることを知り、大変良い学びをさせて頂いたと感じています。今後も関東学院大学を基盤とした日本におけるバプテスト研究の灯火を絶やさぬよう励んでゆきたいと思いますので、どうぞ今後とも宜しくお願いいたします。

## 所員紹介

### 上野 佳代 (看護学部)

Kayo Ueno

2020年4月に就任しました看護学部の上野佳代と申します。所員紹介の拜命を受けご挨拶申し上げます。私は、老年看護学領域の看護基礎教育に携わりつつ、高齢者やその家族が地域でより豊かに生活を続けていく(エイジング・イン・プレイス)ための支援を考え続けています。研究は「高齢者の居場所(サード・プレイス)」で、まちの暮らしの保健室“上野さん”として参画し、生活の中にある気がかりについてエビデンスのある知恵を提供できる機能のある場所における居場所としての意味も追求しています。その中で、人は健康や病気のことを常に考えながら生活をしているわけではないことを教えられています。また、今まで多くの「生」において大先輩である患者様や地域の方々との関わりから宗教における信心は生活や幸せを支える一助であると感じることがあり、本学のキリスト教精神に基づく「人になれ 奉仕せよ」を通じて、看護師をめざす学生と共に人として成長しつづけたいと考え携わっています。



研鑽のために訪問した“マギーズセンター”  
フローレンス・ナイチンゲール記章を受章された秋山正子氏(左)

本学の看護学や他学部の学問は「営みである暮らし」に必要なエビデンスのある知恵の宝庫です。キリスト教と文化研究所における所員として気づきを頂戴しつつ貢献できればと思います。



### 細山田 洋子 (栄養学部)

Yoko Hosoyamada

2020年度4月よりキリスト教と文化研究所の所員に任ぜられました栄養学部管理栄養学科の細山田洋子です。専門分野は、給食経営管理で、主に高齢者施設をはじめとする特定給食施設における栄養・食事管理や給食の品質管理について研究しています。

さて、神奈川県内には、栄養士・管理栄養士養成施設校で構成される神奈川県栄養士養成施設協会という組織があり、毎年1月には、その年に卒業予定の学生が一堂に会して将来の抱負を語り合う「これから栄養士になる人の集い」を主催しています。全国でも珍しいイベントです。コロナ禍であることから、今年度も昨年度に引き続き動画を視聴する形式で行われました。本学代表の学生は、管理栄養士として病院に勤務する決意と共に、周りの人々への感謝と幅広い知識を持つことの大切さを語ってくれました。本学の校訓である「人になれ 奉仕せよ」は、人と社会に貢献する管理栄養士を育て輩出していると感じます。

この度、キリスト教や校訓について改めて学ぶ機会を与えて頂き感謝申し上げます。今後、一層理解を深めていきたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。



## 所員紹介



淡野 哲 (人間共生学部)

Tetsu Awano

今年度より所員になりました人間共生学部共生デザイン学科の淡野 哲と申します。東京藝術大学修士修了後よりCM関係やデザイン企画業務に携わり、その後並行して博士課程で研究に取り組み、法政大学にて非常勤講師を経て現職に至っております。

本学ではグラフィックやプロダクトといった企画を可視化させるデザイン分野を担当しております。私の在籍しております共生デザイン学科は、多様な文化、自然環境との共生に適応し得る人材育成に努めております。発足当初は「共生」という言葉がよく理解されず、どういったことが学べるのか、といった疑問を持たれる方々も多かったようです。しかしながら、現在の社会情勢にあって、多様性への理解が求められ、相互に認め合える共生社会の醸成が叫ばれております。はからずも本学科の主旨が現在最も重要と言える社会の要請となり、最近では「共生」の意味も随分と理解され受験生の目的意識にも変化が見られる様になりました。

本学科が掲げる目的は、本学建学の精神である奉仕の精神と通ずるところであり、キリスト教思想における平和思想と共にあると考えております。今後も社会貢献し得る人材の育成に寄与したく存じます。どうぞ宜しくお願いします。



麦倉 泰子 (社会学部)

Yasuko Mugikura

これまで、障害のある方への個別的な支援のあり方について研究を行ってきました。医療的なケアが必要な重度重複障害の方のご家族に、イギリスでお話をうかがっていた時に、非常に反省した経験があります。自宅でヘルパーを雇用し、生活することを可能にする制度を考案した方ですが、以前は医療的ケアを受けるためには病院に入らざるを得なかったそうです。障害のある息子さんは、一般的にイメージされる「言語」でのコミュニケーションをしない方でした。

当時、イギリスの障害福祉改革の文脈では、政策評価の観点から、地域・在宅での個別援助を利用した暮らしと施設・病院での暮らしを比較し、地域での暮らしの方が生活の質が向上したというエビデンスが得られた、という論文が多く出ていたことから、「その生活の質はどのように測ることができるのですか」と質問をしました。いまから考えれば、言葉によらないコミュニケーションをする人の生活の質を測ることは難しいに違いないという先入観にとらわれていたと思います。お母様は、息子さんは言葉では話さないけれども、病院にいるときには眠っていることが多いのに対して、家で生活している時にはよく笑うのだと話してくださいました。

「言葉によらない」コミュニケーションが存在し、そこには見えにくいけれども、確かな関係性が存在するのだということを言語化していくところに研究者としての責任の所在を感じています。

関東学院大学 キリスト教と文化研究所

〒236-8501横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL : 045-786-7873 (研究所直通・月～金 9:30～17:00)

FAX : 045-786-7806 (研究所直通・24時間受付)

発行者： 石渡 浩司  
Director： Hiroshi Ishiwata